パキスタンにおける言語教育の現状

萬宮健策

1. はじめに
2. 教育に関する基本情報
3. ウルドゥー語教育の現状
4. パキスタンにおける外国語教育の現状
5. CEFR をはじめとする評価法への認識、今後の課題

1. はじめに

本報告は、2014 年２月 27 日から３月 10 日にかけて実施した、パキスタンでの調査に関するものである。訪問先は、同国カラチ市在のカラチ大学（国立の総合大学。1947 年設立）およびラホール市在のパンジャーブ大学（国立の総合大学。1882 年設立）およびオリエンタル・カレッジ（パンジャーブ大学傘下の言語研究・教育専門単科大学。1870 年設立）である。

両大学では、パキスタンの国語であるウルドゥー語、および近年その重要性が増している英語教育の現状、シラバスおよび評価方法につき、関係者から聞き取り調査を実施し、必要な資料収集を行った。

2. 教育に関する基本情報

まず、パキスタンの教育に関する基本情報を振り返っておく。

パキスタンは、南アジアに位置し、1947 年に独立した国である。現行憲法で国教としてイスラームが規定されている一方で、信仰の自由も保障されている。公立学校のカリキュラムにはイスラーム色が色濃くでていることも指摘しておきたい。

国民に向けた義務教育制度は、第 18 次憲法改正（2010 年）で、５歳から 16 歳までの 10 年間の無償教育をすべての子どもの基本的権利と宣言した［黒崎 2013］が、本稿執筆時点で、未だ確立されておらず、初等教育からすべて有償となる。そのため、国民の識字率は決して高くなく、全国平均で 54.9%に留まる。男女間格差も大きく、15 歳以上の男性では 68.6%だが、女性は 40.3%である。

教育機関としては、公立、私立学校に加えて、マドラサと呼ばれるモスクに併設される寄宿制の学校がある。いわゆる過激思想を拡大させる原因となったことから、現在では宗教省の登録・認可制となっている。

教育言語としては、国語であるウルドゥー語のほか、私立学校を中心として、英語が広く用

いられている。必修科目には、ウルドゥー語のほか、英語、算数、理科、社会、イスラーム学（非ムスリムにあっては、別科目で代用可能）があり、これらに加えて各地の地域言語も選択科目となっている。初等教育のシラバス等については、［須永　2014］を参照されたい。

次に高等教育に焦点を当てる。初等教育５年（日本における小学校に相当）、中等教育５年（中学校、高等学校に相当）を修了したものが高等教育（教養課程２年＋専門課程）に進む。高等教育局(Higher Education Commission)によると、2010 年時点での大学院在籍者は 120 万 4349 人で、うち１万 2000 人がパキスタン国内の大学院の博士課程に在籍している。パキスタンにおける大学(university)は、日本では大学院を指す。学部教養課程はパキスタンではカレッジと呼ばれ、大学の傘下と位置づけられる。

3. ウルドゥー語教育の現状

次に、高等教育機関における、ウルドゥー語教育を考える。

国語であるウルドゥー語は、国内のどの大学でも教授されている。ここでは、今回訪問したカラチ大学とパンジャーブ大学の状況に触れる。

カラチ大学のウルドゥー語、ウルドゥー文学専攻課程には、博士課程まで含め約 200 人が在籍している。日本人を含め、外国人留学生も在籍したことがある（している）が、外国人向けシラバスについては、個別対応が基本となる。留学生の絶対数が少なく、留学生向けコースが常設できないという事情があるためである。したがって、担当する教員は、通常の授業のほかに、留学生向け授業を追加して担当することになる。パキスタン国内でウルドゥー語を学びたいと考えたとき、受入機関は各地に存在するものの、その受入体制が整っているとは言いがたい状況である。

こうした状況は、ラホール市のオリエンタル・カレッジについても大差ない。本稿執筆時点で、本学からは学部レベルでオリエンタル・カレッジと国際イスラーム大学（イスラマバード市）に各１名の男子学生が留学中であり、どちらもサーティフィケート（初級）コースに在籍している。彼らに対する各大学の対応も、本人の到着後、どのレベルの授業をどの程度の頻度で行うかが決められる、というものだった。

到達度チェックやその評価法についても、大学ごとにばらつきがあると言わざるを得ない。学部レベル、大学院レベルで統一された基準があるわけではない。シラバスも大学ごとに独自色が出ている。

4. パキスタンにおける外国語教育の現状

パキスタンでは英語の重要性が高まっているが、高等教育機関における英語教育・研究はそれほど熱心ではないと指摘できる。たとえば、今次出張の訪問先の１つであるパンジャーブ大学には英語英文学科があるものの、教員としてネイティブスピーカーは常勤、非常勤を問わず

在籍しておらず、教員の専門分野も文学に偏っており、英語学などの分野が研究対象となることはあまりないと言うことである。その背景として、日常生活に英語を使う機会が少なからずあるため、大学へ行って英語を学ぶ（学び直す）必要性を感じない、ということがある。

パキスタンでは、アラビア語やペルシア語、トルコ語といった、イスラームとの結びつきが強い言語への関心が強いという特徴がある。日本語については、国立現代語大学（イスラマバード市）に日本語学科があり、シニアボランティアの日本人を含む教育体制が取られているが、学習者の総数は多くない。ただし、国内各地に日本や日本語に関心を持つものは少なくないため、機会や場が提供されれば、潜在的な需要はあると考えられる。

5. CEFR をはじめとする評価法への認識、今後の課題

パキスタンでは、外国人に対するウルドゥー語教育が軌道に乗っているとは言いがたい。CEFR についても、浸透しているとは言いがたい状況にある。つまり、ウルドゥー語の何をどれだけ学べば、どのレベルに到達できたのか、ということを測る客観的な尺度が確立されていない。パキスタンの大学でさまざまな外国語を学ぶ場合もこの点は同様の状況である。たとえば、アラビア語やペルシア語を学ぶ場合もどんな内容をどのレベルで学ぶか、といったシラバスは未公開である場合が多い。

日本では、東京外国語大学および大阪大学外国語学部にウルドゥー語専攻が常設されているが、現時点で統一のシラバスがあるわけではなく、大阪大学で独自の到達度目標が設定されているのみである。

今後、本学および日本の教育機関がすべきことは、パキスタンやインドにおける各教育機関のウルドゥー語シラバスを精査し、日本におけるウルドゥー語教育、研究に何が応用できるかを検討し、大学レベルでのウルドゥー語教育のシラバスに活かしていく、という具体的な作業となろう。その際、外国人（より正確には、主として日本語母語話者）向けウルドゥー語教育と、ウルドゥー語を第一言語、もしくは母語とするものに対する教育との違いには留意すべきである。たとえば、文字習得や名詞の文法性をはじめとする日本語にはない文法概念などは、日本での教育特有の項目となると考えられることから、日本独自のシラバスおよび評価法の制定が急がれる。

＜参考文献一覧＞

黒崎卓 2013. 『パキスタンの教育制度の特徴と課題』，科学研究費補助金・基盤研究(B)「南アジアの教育発展と社会変容」（研究代表者・押川文子）最終報告書，pp.1-36 所収
須永恵美子 2014.「現代パキスタンの形成と変容」，ナカニシヤ出版

本稿は，科学研究費補助金・基盤研究(B) 「アジア諸語を主たる対象にした言語教育法と通言語的学習達成度評価法の総合的研究」（研究代表者：富盛伸夫）による成果の一部である.